



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	社会運動における個人の変容：メルッチの社会運動論に焦点を当てて(論文要旨)
Author(s)	保坂,直人
Citation	
Issue Date	2016-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2309/147069
Publisher	
Rights	

氏名	保坂 直人		
専攻分野の名称	博士（学術）		
学位記番号	博乙第 83 号		
学位授与年月日	平成 28 年 3 月 15 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当 論文博士		
学位論文名	社会運動における個人の変容 ーメルッチの社会運動論に焦点を当ててー		
論文審査委員	(主査) 教授	大友 秀明	
	(副査) 教授	安藤 聡彦	教授 竹内 裕一
		教授 下城 一	所長 渋谷 治美
		教授 坂井 俊樹	(放送大学埼玉学習センター)

学位論文要旨

本論は社会運動に参加する個人の変容をテーマに、十九世紀以降の社会運動論をふり返り、イタリアの社会学者アルベルト・メルッチ（1942–2001）の理論に焦点を当てて検討する。そのうえで、社会運動が個人に与える影響、個人が社会運動に与える影響、すなわち社会運動と運動に関わる個人の相互的な変容を、個人の側から「分析的」に問い直すことを課題とした。

第一部「社会運動における個人の変容の理論」では、これまでの社会運動論の潮流を大きく二つに分け、第一章では、＜集合行動＞論から＜集合行為＞論へと発展する理論の変遷を、社会運動に参加する個人の変容という視点から検討した。ここでの検討によって、ル・ボンやタルドらの理論、および＜集合行動＞論が、個人を集合と同質的に論ずる傾向にあったのに対して、＜集合行為＞論は、個人が合理的に行為を選択するという点を重視し、社会運動内部の個人に焦点が当てられるようになっていった過程が整理された。しかし同時に、集合そのものを重視した＜集合行動＞論では集合に属する個人についてその特性を述べるにとどまり、＜集合行為＞論では社会運動に参加する個人に一定程度光を当てたものの、その視点はあくまで集合の側から個人を観察するものであったという課題が明らかになった。

第二章では、社会運動論のもう一つの潮流を築いたマルクス主義的伝統を引き継ぐ運動理論の中から、社会運動に参加する個人の変容に言及し、かつメルッチにも強い影響を与えたグラムシとトゥレーヌに注目してその成果を検討した。経済的矛盾に基づく階級対立を表明するマルクス主義の伝統においては、個人より社会運動の示す方針が優先され、運動に参加する個人は、運動と同質のものとして把握される傾向にあった。しかしグラムシとトゥレーヌは、マルクス主義の伝統が強調する支配と従属の対立構図を維持しながらも、社会運動を外から評価し同質的、画一的な集合と見る傾向から、集合に参加する複数の異なる個人を注意深く考察する方向へと理論を発展させていった。

第一部を通じて、集合の理論およびマルクス主義的伝統を継承する理論は、社会運動と個人を同質化する理論を批判的に修正することで、徐々に社会運動のような集合に参加する異なる複数の個人への視点を明確にしたことが示された。ところが、これらの理論は、複数の異なる個人が

社会運動に関わる際、予定調和的に集合に統合されることが前提とされた。つまり集合と個人の関係については、最終的には個人は集合に属することが求められ、個人が社会運動に参加する理由として「連帯」が強調されたのである。それは、集合に関わる個人を分析する以前に、社会運動は社会を変えるためのエージェンシーとされ、集合内部に共有された価値や高次の意味が優先されたからである。これに対し筆者は、個人は「連帯」を求めて運動に参加するのではなく、参加した個人の間で「連帯」ができるのであり、「連帯」は二次的、副次的なものであるという課題提起を行った。

第二部「高度情報化社会における社会運動と個人」では、第一部で浮かび上がった課題をさらに検討するため、メルッチの社会運動論を手がかりに、社会運動に参加する個人の変容について解釈を掘り下げた。

第三章『『集合行為』としての社会運動』では、社会運動が潜在する紛争を第三者に広く知らしめる「メディア」の役割を担っているとするメルッチ独自の運動論を検討した。メルッチが直視したイタリアの戦後議会外左翼の運動は、彼の社会運動論に大きな影響を与えた。メルッチにとって社会運動は、「紛争」、「連帯」、「システムの両立可能性の諸限界の突破」という三つの「指向」を持つ「集合行為」である。メルッチは、こうした社会運動が既存の支配的コードを書き換える、言わば「コードへの挑戦」を訴える役割を担うとした。

第四章『『いま』を生きる個人の『変容』』では、メルッチの時間論とアイデンティティ論を吟味し、高度情報化社会に生きる個人の内面を論じるメルッチの諸理論を検討した。彼は「円」、「矢」、「点」、「螺旋」というメタファーで人間が経験する時間を論じ、固有の時間論を展開する中で、自己の統合や断片化を表現する。一方で個人のアイデンティティ論を「同一化」、「個人化」、「個性化」という三つの次元から問い直し、行為の結果と行為の意味を探る動的なアイデンティティ論を展開した。メルッチは、支配により制御されたコードに絡めとられずに個人が自律的に自己の統合を図る「いまへの挑戦」を通じて、自らが形を変える「変容」の必要性を強調する。

終章において、筆者はこうしたメルッチの社会運動論と、社会運動に参加する個人の変容についての議論の理論的接続を図った。メルッチの諸理論から浮上する重要な論点は、個人が自己を統合する「いまへの挑戦」を、社会の支配的コードを書き換える「コードへの挑戦」という社会運動の取り組みと一貫した連続性を持たせることで、社会運動という集合と個人を結び付けている点である。メルッチにとって、社会運動という「集合行為」は、「変容」に向け個人が「行為の自律的主体」となるために、「行為の意味」を練り上げる場である。個人は他者との相互作用を通じて「名付け」を行うことで、支配による意味のネットワークに絡め取られず、自らの「行為の意味」を自律的に生産、再生産することを可能にする。こうした集合と個人の相互的な関係は、社会運動という集合にではなく、個人に焦点を当てて社会運動を検討したからこそ明らかになった結論である。冒頭の、「なぜ個人が社会運動のような集合に加わるのか」という問いに敢えて答えるならば、これまで述べてきたように、個人の社会運動への参加は、自らの「変容」に向け、自律的に自らの「行為の意味」を探ることができる集合であるからである。自らの生を過去から「いま」、将来に向け、問い直すために、個人は縦令見返りの乏しいと思われる社会運動にでも関わるのである。

以上のような個人と集合の理論を説き起こしたメルッチは、個人と集合が相互的に変容する過

程で「学び」の重要性を繰り返し述べる。しかしながら、彼は「学び」の内容や仕方について踏み込んだ議論を展開していない。それゆえに筆者は、「学び」の場として社会運動を把握した際、個人がどのような「変容」を遂げるのか、再度問い直す必要を課題として提示した。